三重大学における取組み

三重大学 副学長（学生総合支援担当）　中川　正

1．学生支援方針　▼

三重大学は、2011年2月に、以下のような学生支援方針を宣言した。「三重大学にとって受け入れた学生は『宝』です。その宝が輝くように、教員、職員、学生が一体となって支援します。」入学した学生たちに対してだけではなく、学生を送り出す保護者に対しても、卒業生を受け入れる社会に対しても、三重大学が学生に接する姿勢を表明したものである。

大学が学生をどのような存在と捉えるかによって、教育や学生支援方針は変わる。学生を「自立した成人」とみなすならば、大学は学生に最良の学習・研究機会を提供することに集中すればよいのだが、現実には、不適応学生の対応に本格的に取り組まなければならない状況となっている。一方、学生を子ども扱いし、過剰に指導するならば、彼らが本来備えている能力や資質を特定の型に押し込めてしまうことになりかねない。三重大学は、学生が個性豊かな能力をすでに備えた「宝」とみなし、彼らが自分自身の中にある資質を発見し、その資質が最大限生かされる姿を思い描き、その夢の実現のための計画を立て、実践するための支援をする立場をとっている。学生にみられる幼児性の現実を受け止めながら、学生に「自己決定ができる主体」としての意識を育てるために、「成人」とみなした教育と支援を目指しているのである。

2．PBL推進のなかで　▼

学生を「成人」とみなす三重大学の姿勢は、第一期中期目標・中期計画期間におけるPBL（問題発見解決型学習）の全学的推進の中で養われてきた。三重大学では、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、および総合力としての「生きる力」の育成を教育目標として掲げている。三重大学は、これを「4つの力」として学内外に周知を図っている。そして、この「4つの力」を伸ばすために、PBL（問題発見解決型学習）と、PBLを効果的に推進するための情報基盤整備を進めてきた。

career
NAKAGAWA Tadashi ●
1957年生まれ。1987年ルイジアナ州立大学博士課程地理学・人類学研究科修了。専攻は文化地理学。1987年筑波大学地球科学系講師。1996年三重大学人文学部助教授、2003年教授、2009年度より現職。著書に『文化の法則を探ろう』(2000、三重大学出版会)、『文化地理学ガイダンス』（共著:2006、ナカニシヤ出版）ほか。

PBLは、「学生にはすでに問題を発見・解決する資質が備わっているので、教員は学習者の資質を引き出す援助者の役割を担う」という成人教育学（アンドラゴジー）の理念を前提としている。この前提のもと、PBLマニュアルの整備、FDの実施、PBL授業実践の共有化等が行われたが、中でも授業の制度的な推進で重要な牽引役を果たした授業が、共通教育における「PBLセミナー」という1週間2コマの科目であろう。「PBLセミナー」は、身近な素材やプロジェクトを用いて、自己学習とグループワークを組み合わせた能動的学習を行わせ、その学習成果を公開の場で発表させる等、いくつかの共通の要件を満たす授業であり、2006年度に導入以来、毎年200名～400名程度の学生が受講するようになっている。

しかし、PBLの浸透という成果が生まれる一

方で、学生の多様化の問題に直面した。PBLセミナーを選択する学生は、もとより積極的な学生が多い。一方で、能動的学習を好まない学生は、PBL受講を避ける傾向がある。すなわち、自立性と社会性獲得のために特別な支援を必要とする学生にPBLの恩恵は届きにくい状況が続いた。

また、大学教員には多様な教育観があるために、全学的な教育方針が、必ずしも好感をもって受け入れられたわけではなかった。初年次教育についても、学部によって異なった方針が持たれ、また学部の中での学生の指導方針は、担当教員の判断にゆだねられる状況にあった。全学的な教育方針を浸透させる過程では、「学生を成人扱いせよといいながら、大学は教員を子ども扱いしている」という批判も生まれ、運営上のジレンマに直面した。

このように、三重大学の教育改革の恩恵は、元来積極的な態度をもつ学生に対して効果を発揮しつつ、能動的学習態度の育成が最も必要な学生には届かないという問題が生まれてきた。この構造的な問題は、教員の教育観の多様性を前提としたうえで解決を目指さなければならないという状況にあった。

3．共通プログラムによる初年次セミナーの導入 ▼

多様な学生に自立的な学習態度という共通基盤を生み出すために、2008年に三重大学は、統一プログラムによるPBL型初年次教育の必修化を目指すこととした。第一期中期目標・中期計画期間における教育の取組みとして、PBLやそれに伴う情報基盤整備に関して高い評価を受ける一方、学生に「4つの力」とは何かに関する認識は生まれていないという問題点も浮かび上がってきた。三重大学はこの課題を解決するうえで、共通教育に、統一プログラムによる「4つの力スタートアップセミナー」という初年次授業を新設することが効果的であると判断した。既存の初年次プログラムを否定するのではなく、PBLに関する実績を生かしつつ、「4つの力」の共通認識を生みだしながら、能動的に自らの資質を育てるセミナーを新設することによって、全学共通のプログラムと学部主体の多様なセミナーの両者を生かすことができると考えたのである。

本セミナーを導入した2009年度において、医学部、工学部、生物資源学部では必修科目、人文学部と教育学部では選択科目とした。その結果、受講者数は1,085名となり、2010年度には、教育学部において必修となり、受講者数は1,171名となった。人文学部は、学科別に初年次セミナーを整備しており、その中に全学の教育方針を教える時間を加えるという対応をとっているために、現時点では「4つの力スタートアップセミナー」を必修とはしていない。とはいえ、2011年度には、選択科目としての人文学部学生の受講者は過半数となっており、三重大学全体では学生の90.2％にあたる1,249名が受講するまでとなった。

4．「4つの力スタートアップセミナー」の内容 ▼

2011年度においては、本セミナーは、1年次生を40名単位で学部別に編成し、全29クラスで行われた。授業案は、高等教育創造開発センター専任教員と、4学部にわたる10名の教員によって作成された統一プログラムである。その授業の実施にあたっては、全29クラス中27クラスを、3人の高等教育創造開発センター教員が担当することによって、質の統一を図った。毎週、1クラスを研修用の授業とし、その授業後に、毎回授業案に関する検討を行い、絶えず改善を重ねながら、首尾一貫した授業とする努力が重ねられている。2009年度の授業実践をもとに、2010年度にテキストの編集を行い、2011年度よりそのテキストをもとに授業を行っている。

2011年度における授業内容は表1のとおりである。授業内容設定のポイントは、「4つの力」を理解させること、ノートテイキング・情報リテラシー・レポート作成・プレゼンテーション等の

アカデミックスキルを獲得させること、グループ活動を通して能動的学習を推進すること、プロジェクト遂行を組み合わせた実践的学習を行うことである。

多様な背景をもった学生を、少数の教員で効果的に指導するためには、授業の運営方法に細心の注意を払う必要がある。原則として、4人グループを固定化して、学生が毎回のグループ学習を通して互いに交流を深め、省察を行わせ、共にプロジェクトを遂行させることを通して、グループ内の自発的相互支援を誘導した。そして、可能なクラスには上級生のファシリテーターを配置して、グループ活動が円滑に進んでいないグループに対するサポートを行っている。

同セミナーは、グループ内の各自の役割を明確化することを通して、全員がPBLに関わることができる工夫をしている。毎回の授業では、その日の目標と流れの確認、前回課題の共有を行った後、2回ほどのディスカッションを行う。そのセッションでは、各自定められた時間の意見発表を行い、時間が来ると次の人が発表を行う等、どの時間にだれが語るかということを明確化することが多い。そのことを通して、譲り合って沈黙が続いたり、特定のメンバーが時間を独占したりするような事態を防ぐ。授業の中盤以降、プロジェクトが進むとグループ活動時間は増すが、その時には互いを尊重した議論ができるようになっている場合が多い。

2011年度より、三重大学では、学生の不適応を早期発見するためにも、本セミナーを活用している。学生が3回連続して欠席した時には、当該学生を学生総合支援センター長に報告することとなっている。学生総合支援センター長は、その報告を受けて、学生が所属する学部の学生委員に、学生委員は担任に連絡をとる。担任は2週間以内に本人または保護者と連絡を取り、その結果を学生総合支援センター長に報告する。この結果、2011年度前期において、3回連続欠席の報告は、8名のみである。学生の不適応を網羅的に発見し、対処する上で、効果が確認された。

このように、学生の居場所を明確化し、タイムマネジメントに工夫を凝らすことを通して、学生が互いをケアする仕組みを授業につくりだし、その結果、学生の遅刻や欠席等は少なくなり、本セミナーが学生の学習と生活のリズムを生み出す契機となった。さらに、出席管理等を通して、全学的に不適応学生の早期発見と対応を行い、成果を上げている。

表1 「4つの力スタートアップセミナー」授業内容（2011年度）

回	テーマ	意識する力(下位項目)	意識する力(上位項目)
1	導入、大学での学び	モチベーション	感じる力
2	グループ活動の基本	社会人としての態度	コミュニケーション力
3	アイデアの発想	感性	感じる力
4	テーマの設定	課題探求力	考える力
5	情報の種類と特徴	情報受発信力	コミュニケーション力
6	計画の立て方	問題解決力	考える力
7	情報収集における手順とマナー	倫理観	感じる力
8	プロジェクトのピアレビュー	感性、共感	感じる力
9	情報の吟味	批判的思考力	考える力
10	レポートの作成	論理的思考力	考える力
11	発表の方法	情報受発信力	コミュニケーション力
12	プロジェクトの発表と評価(その1)	統合力	生きる力
13	プロジェクトの発表と評価(その2)	統合力	生きる力
14	プロジェクトのふり返り	統合力	生きる力
15	全体のふり返り	統合力	生きる力

5．キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム ▼

「4つの力スタートアップセミナー」は、全新入生に対して、大学の学習と生活に適応させることを目指す底上げ型授業である。すなわち、全学生に基礎的な学力と対人関係調整力をつけさせるという課題に対応する授業である。一方で、成長できる学生をさらに引き上げる仕掛けづくりも別途の課題となる。この両課題を同時に解決するために、本学は「キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム」という制度を導入した。

全国の大学で展開されているピアサポーターには、学生目線で学生の相談を行うという「よろず相談所」の役割を担っているケースが多い。一方、三重大学においては、大学というミニ社会において、他の学生と関わりながら多様な経験を行うことは、キャリア力を獲得する上で有益であるという視点から、よろず相談に限らず、多様な学生支援活動や社会連携活動にまで範囲を広げた「キャリア・ピアサポーター」の養成を目指している。三重大学は、キャリア・ピアサポーターたちに、他者への支援を促すとともに、自らも支援や社会連携活動を通して、就業力や市民性を成長させるようチャレンジの機会を与えている。

一般的に、一つのことに積極的な学生は、他のことにも積極的であり、学生のリーダーとして目立った働きをする。大学がピアサポート活動や、ボランティア活動、環境活動、地域連携活動等を推進しようとするときには、ともすれば、そのような一部の活動的な学生たちの奪い合いになりがちであり、活動的な学生が消耗する一方で、目立たない学生たちの資質が伸ばされないままに放置される場合がある。三重大学は、そのような目立たない学生にも宝が秘められており、その宝を発見し、宝が輝いた夢を描き、その夢を実現するステップをデザインして実践を行うという学生支援方針を打ち立てている。その実現のために、どのような学生にも社会の中で得意分野があるはずであるという前提で、教職員ばかりではなく、学生たちにも他の学生に眠る宝を発見させる姿勢を育成するプログラムを構築している。

キャリア・ピアサポーター初級資格取得者は、学生支援の業務に参加するための基礎的な素養が認定され、学生の個別学習補助に関わることができる。また、上級資格取得者は、共通教育や学生総合支援センターにおけるSA（Student Assistant：授業や補習の補助者）に申請する資格を得る。いずれの資格も、履歴書に記載する等、就職活動に生かすことができるものとして、取得を勧めている。

初級資格取得のためには、「4つの力スタートアップセミナー」に加えて、キャリア科目の入門としての「キャリアプランニング」の受講が必修科目として求められる。この2科目に加えて、「キャリア実践科目」と総称される多様な実践系の科目を一つ選択しなければならない。その実践系科目自体が、大学の実際の業務や、直接学生支援に関わる活動である。2011年度においては、学生の生活支援を行う「学生生活支援実践」、留学生支援を行う「留学生支援実践」、日本人と留学生との交流を進める「留学生支援実践」、オープンキャンパス等で三重大学の紹介を行わせるための訓練をする「大学紹介実践」、広報誌を編集する「広報編集実践」、キャリアイベントの企画運営を行う「キャリアイベント実践」、環境ISO活動を行う「環境ISO実践」、地域連携を行う「地域づくり実践」、三重県との連携を行う「美し国おこし・三重実践」、学習公開イベントを企画運営する「法則探検実践」という10科目が開設され、300名の受講生があった。

キャリア実践科目受講生は、大学で実際に行われる活動を行い、学生支援活動等を行うとともに、その成果を2月に行われる「アカデミックフェア」とよばれる公開の学習成果発表会で報告する義務を負う。同時に、各クラス2名の代表によって組織されるアカデミックフェア学生運営委員会を通して、当日の運営の一部を担わせる。さらに、ピアサポーター学生委員会に、アカデミックフェア終了後の交流会の企画運営を行わせるのである。

これら一連の実践的学習活動を通して、就業力を獲得させるとともに、学生支援の実践を通して市民性を獲得させるのである。

この3つの科目を履修し、初級資格を取得した学生は、上級資格取得のために、さらに「学習支援実践」、「こころのサポート」および選択科目2科目の単位取得を目指すこととなる。「学習支援実践」は「4つの力スタートアップセミナー」のファシリテーション実習である。実習生は、29クラス開講されている「4つの力スタートアップセミナー」の1つに参加して、教員の補助をするとともに、ファシリテーターとしてのよりよい関与の在り方や学生の活動や学習を深化・促進するための工夫を提案する。そのために、受講生たちは、実習先の授業での活動後、水曜日の5コマ目に集まり、振り返りを行う。この授業を通して、「4つの力スタートアップセミナー」における新入生の適応補助に、上級生が関わるのである。このような支援を行う過程で必要となる心の問題に関する知識は、もう一つの上級資格必修科目である「こころのサポート」を通して獲得させるようにしている。

上級資格は最短で2年次前期末に取得が可能となる。上級資格取得者は、SAとしての申請資格が得られるために、2年次後期から、授業補助に加わることができる。後期には「キャリア実践」諸科目が開講されるので、前年度の受講生が、同じ内容の授業のSAとして雇用される等、学生が学生をサポートしながら実践力を身につけることができる。さらに、3年生になると、「4つの力スタートアップセミナー」や「学習支援実践」のSAとしての活動が可能となる。このようにして、キャリア・ピアサポーター資格教育プログラムは、三重大学が教育目標とする「4つの力」を自ら獲得しながら、他の学生にも伝えていくことができる学生の養成を図っている。

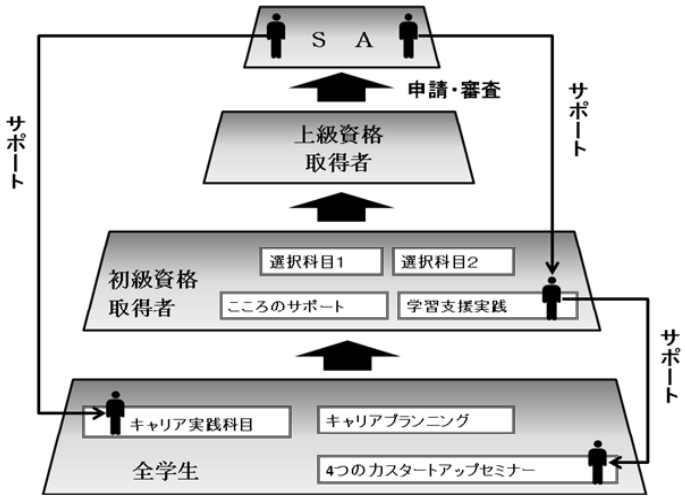
このプログラムを通して、2011年度末において、初級資格取得者は115名、上級資格取得者は17名誕生している。SA導入初年次となった2011年度においては、7名がSAとして活動を行った。2012年度においては、上級資格取得者の範囲を広げるために、「4つの力スタートアップセミナー」の補助を行う「学習支援実践Ⅰ」に加えて、数学学習支援を行う「学習支援実践Ⅱ」、および留学生に日本語を教える訓練を行う「学習支援実践Ⅲ」を開講することとした。

6．ピアサポーター学生委員会 ▼

2010年度にキャリア・ピアサポーター資格を取得した学生によって、ピアサポーター学生委員会を発足させた。2011年度末において活動に関わっている学生は20名である。三重大学では、伝統的に学生による課外活動やボランティア活動が活発である。学生の60％が課外活動に参加し、大学祭では150名による実行委員会が組織されている。また、環境ISO学生委員会は、全国でも有数の活動を行っており、生協学生委員会や応援団も、学生支援活動に関わっている。

ピアサポーター学生委員会は、それらの既存の活動に対抗したり、「大学のお墨付き」をもって正統性を主張したりするために組織され

図1　キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム



たものではなく、既存の活動や、キャリア実践授業を通して行われている学生支援活動を尊重しつつ、それらの活動をつなぎ、それらではカバーできない領域を補い、学生総合支援センターを通して、学生のニーズと大学をつなぐ働きをするためのものである。

ピアサポーター学生委員会の学生たちには、支援者としての「大人性」を鍛えるようにチャレンジしている。すなわち、主役は支援対象の学生たちであり、自らは脇役として支援対象者の成長を喜ぶ資質を伸ばしているのである。彼らは、大学内で活躍している学生たちの活動を自らの誇りとするとともに、宝が十分に輝いていない学生たちにどのように寄り添うことができるかを考えている。

キャリア・ピアサポーターの学生支援に関するミッションを明確化するために、2010年の12月末に、教員、職員、学生が共に語り合う「学生支援サミット」が開催された。学生たちは、教職員とともに、三重大学の学生支援の強みをともに探し、夢を描いた後で、その夢の実現のための基本的な方針をまとめた。

この「キャリア・ピアサポーター宣言」は以下のようなものである。「キャリア・ピアサポーターは、多様な教育環境や学生・教員・職員の連携・協働を活かして、学生が自己の可能性を見つけるきっかけづくりをします。そして、人とのつながりを大切にし、大学全体でともに高め合える風土づくりを目指します。」学生たちは、この理念をキャリア・ピアサポーターの頭文字であるCPSの3つの文字を組み合わせたロゴに表現した。また、「三重大サポ太」というオリジナルキャラクターを生み出して、キャリア・ピアサポーターたちがそれぞれの強みを活かしながら学生支援を行うイメージを可視化した。

キャリア・ピアサポート資格教育プログラムの成果は、ピアサポーター学生委員を生み出すだけではない。すでに環境ISO学生委員会、生協学生委員会、ボランティア活動等で活躍している学生たちにも資格取得者を生み出し、既存の活動の中にも、学生支援方針の浸透を図っているのである。

7．今後の課題 ▼

2009年度に「4つの力スタートアップセミナー」を開始して以来、三重大学は、初年次教育、キャリア教育、学生支援体制の改革を進め、一定の成果を上げてきたが、いくつかの課題も浮かび上がってきている。

まず、これらの取組みを推進してきた高等教育創造開発センター、共通教育センター、学生総合支援センターの教職員と、学部の大多数の教員との間に、かなりの温度差があることである。どの改革も、正式な手続きを経て行われてきたものであるが、急激な変化であったために、十分に周知されているとはいえない状況である。今後、これらのセンターと学部との密接なコミュニケーションが課題となる。

次に、プログラムの導入に伴って生じた予測とは異なる結果の検証を行い、適切な修正を施す必要がある。たとえば、キャリア・ピアサポーター上級資格取得者17名中人文学部所属が15名であり、SAとして活動した7名全員が人文学部生である。プログラムに全学的広がりを生みだし、資格取得者の活躍場所を確保することが、早急に取り組むべき課題となっている。

さらに、継続的にプログラムを遂行するために、安定した教員体制が必要となる。「4つの力スタートアップセミナー」担当者は過重な授業負担を抱えている。また、30科目開設されているキャリア関係授業の3分の2を、特任教員を中心とする学生総合支援センターのスタッフが担当している。この課題の解決に向けて、三重大学の教養教育の将来像に関する議論の中で、初年次教育やキャリア教育の位置づけを明確化する必要がある。

「4つの力スタートアップセミナー」導入年の学生が4年生となる2012年度を迎え、三重大学の教育改革の試みの成果が問われる時期になってきた。三重大学は、現状を的確に分析し、さらなる改善に向けて取り組んでいきたい。